旭川医大 病院ニュース

http://www.asahikawa-med.ac.jp/

編集　旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
廣 川 博 之

副病院長 就任にあたって

副病院長　大崎　能伸

平成28年４月１日をもちまして旭川医科大学病院副病院長に就任致しました。今までは、卒後臨床研修センター長と感染制御部長を拝命していましたが、事故防止・安全問題担当の副病院長に就任するのに伴いまして、古川博之副病院長から医療安全管理部長を引き継ぐとともに、卒後臨床研修センター長を免じていただきました。今後は副病院長とともに、医療安全管理部長兼感染制御部長という旭川医科大学病院の命運を左右するような重責を担うことになりました。

平成20年５月に呼吸器センターが開設されました。今年で８年目に入り、呼吸器外科、呼吸器内科ともに実績が積めるようになってきました。肺癌の治療は平成14年から分子標的薬が導入されて、革命的な変化を遂げています。現在は、第３世代の分子標的薬が開発されて、進行癌でも５年生存が得られる時代に入りました。それに伴い、肺癌治療は遺伝子変異を診断して、それに合わせた治療薬が選択されます。また、平成28年からは免疫チェックポイント阻害薬という、全く新しい免疫療法薬が肺癌治療に導入されました。この治療によって進行肺癌でも治癒が得られる可能性が期待されています。さらに、気管支喘息の治療もIgE自体やIgE産生細胞に対する阻害薬が導入されてきます。COPDも新薬がどんどん出てきますし、感染症の治療は相変わらず呼吸器診療の重要な課題です。このように、呼吸器科の長として日々進歩する新しい呼吸器医療を旭川医科大学病院に導入することも私の大切な使命です。

いずれも70点では許されない高いレベルが要求される重要な職務が重なりました。とてもできませんと言うのは簡単ですが、今ここで重責をいただくのも、まだまだ頑張れという天の声と割り切って努めていきたいと考えています。皆様の厚いご協力をいただかなければ到底こなせる役職ではありませんので、後任卒後臨床研修センター長の山本明美教授共々よろしくご支援くださるようにお願い致します。

内科学講座（消化器・血液腫瘍制御内科学分野）教授 就任にあたって

教授　奥村　利勝

平成28年２月10日付けで旭川医科大学内科学講座消化器・血液腫瘍制御内科学分野（第三内科）教授に就任致しました奥村利勝です。私は1984年旭川医科大学を卒業（６期）し、直ぐに第三内科に入局致しました。消化器病や心身医学の臨床や研究に従事し、第三内科で18年仕事をし、2002年に旭川医科大学に新設されました総合診療部の教授に就任させていただきました。以後13年間総合診療部で仕事をし、今回再度第三内科に戻り教室の舵取りをさせていただく事になりました。既に２ヶ月経過しましたが、この重責を実感しております。旭川医科大学病院の皆様には、これまでも大変お世話になってまいりましたが、今後ともご指導ご鞭撻いただけますようにお願い申し上げます。

今後目指すところは、教室・同門（300名）が一体となって、本大学病院にも、そして地域にも更に大きく貢献する組織作りです。本第三内科はこれまで、診療　研究　教育　地域医療に多くの功績を残してきておりますが、まだまだ改善の余地は大きく残されております。魅力的な臨床現場を拡充し、学生・研修医・大学院生教育を更に充実させ、自然に若い人が多く集まる教室作りに邁進致します。内科全般に強く、消化器や血液腫瘍領域に深い真の消化器内科・血液腫瘍内科専門医の育成を目指します。関連地域医療機関と大学との密な連携のもと、消化器内科及び血液腫瘍内科領域の診療の充実、病院経営への貢献、大学病院に求められる臨床英語論文報告へも貢献していきます。今後、教育　研究　診療　社会貢献　すべての分野で、今日までの私の経験の上に、母校である旭川医科大学の発展のため、全力を尽くします。

看護部長
就任にあたって

看護部長　原口眞紀子

本年４月１日付けにて、旭川医科大学病院看護部長に就任いたしました。私は昭和62年、旭川医科大学医学部附属病院に助産師として入職し、産婦人科病棟に勤務いたしました。平成５年からは１年間、士別市立病院に勤務しております。看護師長としては、教育担当部門、４階東ナースステーションで経験を重ね、教育担当部門では初代の看護師長として、厚生労働省から示された看護師の看護実践能力育成指針や、新人看護職員研修ガイドラインの基づき、新人看護職員の教育体制を整備いたしました。その後、４階東ナースステーションでは、助産外来の拡大及び、助産実践能力の向上と地域貢献を目的とした助産師の出向に取り組みました。平成25年からは、業務担当副看護部長として、看護師が患者のベッドサイドに立ち、チーム医療の一員として質の高い看護を効率よく実践するために、看護業務の評価と改善、業務の安全と事故防止対策、物品管理の有効利用に取り組んでまいりました。

旭川医科大学病院看護部は、地域の人々に信頼される看護を提供するとともに、豊かな創造性を持つ看護職を育成することを、理念としています。変化する社会の中で、地域医療を支える最北の大学病院として、先進医療に対応した「専門的知識と技術、判断に基づいた安全・安楽な看護の提供」「患者さんの主体性を尊重し、退院後の生活を見据え、他職種と連携した看護」を目指しています。そして、高度な看護実践力を持ち、チーム医療の中で、看護職の専門性を発揮できる看護師を育成するとともに、看護職のキャリアを支援し、働き続けられる職場づくりに取り組んで行きたいと思います。今後ともご指導、ご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

副看護部長
就任にあたって

副看護部長（入退院センター副センター長）　金田　豊子

このたび、副看護部長（入退院センター副センター長）を拝命いたしました。

入退院センターは、入院に関する対応を一元化し、入院前から退院後の生活を見据え患者さんの身体的・社会的・精神的リスクを早期に把握し、問題解決に向けたチーム医療を推進し患者サービスの向上を図ることを目的に平成20年に設置されました。平成27年度のケースマネジメントは年間6000件を超え、対象診療科をすべての一般病棟へ拡大しました。また、ベッドコントロールは年間790件を超え年々増加しています。

一般病棟・救命救急センターで看護師長を経験してきましたが、入退院センター稼働後は、入院前に患者情報を確認し病室やベッドなど適切な環境を事前に準備することができ、入院時の情報収集時間が減少しケア時間が増加したことや、ベッド確保が困難な場合でも、スムーズにベッドコントロールできるようになったことを実感しています。また入退院センターでは、入院時の必要物品、手術や検査に伴う抗血栓薬や糖尿病薬の中止、点眼指導、絶飲食など処置の説明を行っており、患者さんからは入院前に説明を聞いたので安心して入院できる、病棟看護師からは入院後のオリエンテーションがスムーズになったなどの声が聞かれています。

ベッドコントロールは、状態が安定している患者さんを他病棟へ転棟できるように調整していますが、実際に経験してみると、受入可能で患者状態にあった適切な病棟への調整の難しさを痛感しています。しかし各病棟の協力体制が確立されており、どの病棟も多岐にわたる診療科の患者さんを受け入れてくださるのでとても助かっています。今後の課題としては、入院に関することだけではなく、スムーズな退院に向けて地域医療連携室とも連携を強化し、さらに効果的な病床利用を目指し経営に貢献していきたいと考えています。

各部署の皆様には色々とお世話になることと思いますが、ご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

副看護部長 就任にあたって

看護部
副看護部長　井戸川みどり

平成28年４月１日付で、看護部 業務担当副看護部長を拝命いたしました。私はこれまで、心臓・血管外科、整形外科などの一般病棟と中央部門の手術部を経験してきました。また、宗谷・上川管内の地域の病院で勤務した経験があります。

業務担当副看護部長は、看護職が専門性を発揮し、看護実践力の向上に向け、現場の状況を把握し、効率的な業務の見直し、様々なデータを用いた看護の可視化、質評価を行う役割があります。また、社会・地域の状況や医療・看護の動向を見据え、問題点やリスクを予測した活動が重要と考えます。

現在、医療・看護においては、少子高齢化社会の進行に伴い、2025年を見据えた医療機能の分化・強化・連携、地域包括ケアが推進されています。今年度の診療報酬改定においても重症度、医療・看護必要度が、急性期の密度の高い医療を必要とする状態を適切に評価することを目的に大幅な見直しがあり、基準を満たす患者の割合が15％から25％に大きく引き上げられました。また、地域完結型医療に向けては、地域との連携や退院支援に向けた関わりが重要とされ、今まで以上に患者さんの意思決定を支援し、入院から退院後の生活を見据えた看護が求められています。今後、さらに在院日数の短縮、病床稼働率の上昇、高齢患者、手術・重症患者の増加などが予測されます。専門的知識と判断に基づいた安全・安楽な療養環境の提供と地域社会の人々に信頼される看護サービスの実現に向け、現場の声を真摯に受けとめ、問題解決に向け多角的視点から取り組んでいきたいと考えます。また、患者中心の医療・看護の提供に他職種・他部門との協働は必要不可欠です。旭川医科大学病院の強みはチームワークの良さだと感じています。看護部も看護部長を中心に看護職が一丸となり様々な問題や変化を乗り越えていきます。他部署・他部門の皆様には色々とご協力いただくことが多いと思いますが、今後ともよろしくお願いいたします。

事務局長 就任にあたって

事務局長　坂口　広志

本年４月１日付けで事務局長に就任いたしました。出身は富山県ですが、初めての北海道勤務ということで３月に引き継ぎに来た時の寒さには驚きました。文部科学省では、主に会計課（特に予算関係）や文教施設整備関係等に携わらせて頂きました。財務部長としては、静岡大学、東京工業大学、名古屋大学で勤務し、病院関係では筑波大学附属病院で事務部長として勤務しました。筑波大学病院時代には、国立大学附属病院長会議やその中の常置委員会、データベース管理委員会等で病院運営についての議論の場に、さらに国立大学附属病院のグランドデザイン策定に参画させて頂きました。現在、その改訂が進行中のようですので、更に改善されることを見守っていきたいと考えています。

国立大学法人を取り巻く環境は大変厳しい状況です。国からは、教育の質保証、グローバル化に対応した人材育成、研究力強化、大学のガバナンス改革、更には財政基盤の確立による経営基盤の強化も求められています。また、病院については、前回の消費増税による影響等の減益傾向、高度な医療提供のための医療機器の更新のための財源確保の困難さ等、ほかに本学独自の問題、課題等もあります。その中で、組織として問題等を単に感覚的にとらえるのではなく、いかに客観的にデータ分析や状況の把握ができ、それを可視化できるかを目指し、一つ一つの事案に確実に対処していきたいと思います。

本学の建学の精神でもある地域医療への貢献といった原点に立ちながら、最先端の医療のための診療・教育・研究について、構成員が一丸となって取り組めるように「チーム事務局」としてサポートを実践できるよう努力していきます。

本学附属病院の発展と地域をリードする医療拠点作りのために皆様と歩んでいけるよう、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

FRESH VOICE

憧れの薬剤師を目指して

薬剤部　菅谷香緒里

今年の2月下旬に行われた薬剤師国家試験になんとか合格し、4月1日に初出勤したときは緊張よりも旭川医科大学病院に再び来られたというほっとした気持ちでした。

私は、５学年時の実習をこの旭川医科大学病院で行い、“ここで働いている薬剤師のようになりたい”と強く思いました。実習前は漠然とイメージしていた病棟薬剤師が明確に、そして自分の目標が一つ決まりました。その目標に近づくために、憧れの人たちと同じ職場で働き、沢山のことを吸収したいと思い、旭川医科大学病院を希望しました。

就職して１ヵ月が経ち、基本的な調剤について理解し、少しずつですが１人で完結できる作業が増えてきました。１人でできることが増え、嬉しさと同時に間違えられないという緊張感も増しました。また、自分が考えていたよりも、締め切りの時間や急ぎの連絡によって手早く行わなければならないことが多いということが分かりました。私は焦ると単純なミスをしてしまいそうになります。急いでいる中で冷静に考え、時には疑義照会をしている先輩方の姿を見て、自分もできるようになるのだろうかなど、不安に思うことも多いですが、今はどうしたら間違えたことに気づけるかを考え、同じミスを繰り返さないように心がけています。１つの間違いを正すことの大変さを理解し、要所で確認する癖をつけることと焦らないことを意識するようにしています。

まだまだ薬剤師とは呼べない状態ですが、疑問に感じたことは細かなことでも調べ、分からないときは先輩方に聞くようにしています。答えにつながるヒントや調べ方、関連事項など優しく丁寧に教えて頂いています。また、一緒に就職した同期は全員薬剤師１年目なので負けないように互いに切磋琢磨していき、将来は、実習時に“すごい”と感じた先生方のような他の医療従事者から信頼されている薬剤師になりたいと思っています。

国立がん研究センター「認定がん専門相談員」の認定を受けました

がん相談支援センター 看護師長　澤田　裕子

今や国民の２人に１人は、がんと診断される時代となりました。長い間がんは死に直結する疾患と恐れられていましたが、医療は日々進歩し、がんは長い期間つきあっていく慢性疾患と捉えられるようになりました。働く世代の罹患に関わる就労問題、高額な薬物療法や治療の長期化による経済的問題、介護する家族の問題など、患者さんの苦悩はがんの治療をどう選択するかにとどまりません。当院がん相談支援センターでは、このような患者さん、家族からの相談に対面、電話で対応しています。相談者が明確な答えを求めている場合も、ただただ思いを伝えたい場合もあります。混乱しながら一緒に状況を整理する中で、何が真の問題なのかご自身で気づいて、意思決定し前に進むことができる場合も少なくありません。さまざまな苦悩の中にいる相談者を前にして、医療や看護の知識だけでなく、その方を生活者としてとらえる視点やコミュニケーションスキルも相談員には必要とされます。日々、相談の質の維持、向上が必須であると感じています。

さて、平成27年度より国立がん研究センターではがん相談支援機能の充実と相談対応の質の担保・向上を目的とし、継続的かつ系統的な学習の場の提供を促進するため「国立がん研究センター認定がん専門相談員」の認定事業を開始しました。当院のがん相談支援センターには私を含め２名の看護師ががん専門相談員として専従、専任配置されています。私たちも認定取得にチャレンジし、e-learningと試験、所定の研修を修め、３月に認定を受けました。

筆者（左）、鎌仲知美 がん専門相談員（右）

認定がん専門相談員のバッジ

よりよい支援を行うためには、目の前のがん患者さんや家族との関係、がん相談支援センターと病院（組織）との関係、そして、病院とその地域との関係を視野に入れたしくみ作りが大切と言われています。院内、院外に認知され、多職種のチームでアプローチし、がん患者さんや家族、地域住民のより良い社会資源（相談相手）となることができるよう今後とも情報発信、研鑽していきたいと思います。

アドバンス助産師に６名が認証されました

アドバンス助産師とは、助産実践能力習熟段階（Clinical　Ladder of Competencies for Midwifery Practice,）(CLoCMiP）クリニカルラダーのレベルⅢに該当する助産実践能力を認証された助産師の事です。クリニカルラダー認証制度とは、助産能力が一定の水準に達していることを、全国で統一した方法で審査し認証する制度です。この制度の目的としては、妊産褥婦や新生児に良質で安全なケアを提供できること、助産師が継続的に自己啓発を行い、専門的能力を高める機会を持つこと、社会や組織が助産師の実践能力を客観視できることです。クリニカルラダーレベルⅢを認証された助産師は、自立して助産ケアをできる助産師として公表することが出来、アドバンス助産師と称します。

この認証には、書類審査と客観的試験に合格することや、分娩介助例数や新生児や妊婦の健康診査の実施例数などの助産経験の関する要件と研修受講に関する要件があります。全国で初年度（平成27年度）は5562人が認証され、４階東ナースステーションで４名、４階西ナースステーションで１名、外来ナースステーションで１名の合計６名の助産師がアドバンス助産師に認証されました。現在行っている助産外来の充実と拡大、正常分娩の自立した助産ケア、他科に入院している妊産褥婦のケアのコンサルテーション、地域社会への働きかけなど、活動の場を広げていきたいと考えています。

（４階東ナースステーション　看護師長　阿部明美）

看護の日、看護週間

看護部総務委員会

「看護の日」は、現代の少子高齢社会を支えていくために看護の心・助け合いの心を一人ひとりが分かち合うことが必要で、こうした心が育つきっかけとなるよう1990年に旧厚労省により制定されました。フローレンスナイチンゲールの誕生日にちなみ５月12日が「看護の日」、その日をはさむ１週間（今年は５月８日～５月14日）を看護週間として、当院でもさまざまなイベントを行いました。

今年の看護の日のテーマは「はじめて見る、母の顔」。このテーマは、「初めて目にした仕事をしている母親の姿をみて、カッコいいと思った」というエピソードからきています。このテーマのように、働くお父さん看護師、お母さん助産師、お母さん看護師の仕事中の写真を展示しました。家庭での表情とは違い、仕事している真剣な眼差しが印象的でした。また、市内の５校の高校生が参加するふれあい看護体験がありました。29名が参加し、白衣を着て看護を体験しました。将来看護師を目指している方が多く、この体験を通して、「看護師になりたい気持ちが強くなった、人の役に立てる仕事だと感じた。」と話し、これを機会に、信頼される医療人が誕生することを期待します。

看護の日フェアとして、健康講座は認知症看護認定看護師による「認知症の基礎知識と予防対策」や「ロコモティブシンドロームって何？要介護・寝たきり予防に今から対策を」の講演、パネル展は、「10年後の旭川はどうなるのか」「100円で揃えられる介護・看護グッズの紹介」を展示しました。さらには、今年度初めて、旭川医科大学女声コーラス　ソルフェージュの皆さんによる「歌の夕べ」を開催しました。「さくらさくら」「川の流れのように」「糸」等５曲を披露していただき、患者さんからも「気分転換できました」「素敵な歌声でした」と好評でした。

看護の日の看護フェアの開催に、協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

一般財団法人　旭仁会の紹介

一般財団法人 旭仁会 専務理事　伊東　慶和

日頃より格別のお引き立てとご利用をいただき誠にありがとうございます。

一般財団法人　旭仁会（以降当財団）は、旭川医科大学附属病院（旧名称）が昭和51年11月１日開院と同時に、病院の患者さま等に日常生活に必要な各種サービスの提供を行うために設立された団体としてはじめさせていただき、現在に至っております。

当財団の大きな目的として、旭川医科大学病院の患者さまの生活必需品の円滑な供給、慰安救援はもとより、同病院の診療及び教育研究に対する奨励助成をさせていただき、もって医学の振興と健全な福祉社会の向上と発展に寄与することとし、教職員、学生各位の福利厚生事業を行ってきています。

主な事業として、

①コンビニエンスストア「ローソン」(売店)

平成23年６月１日に従来の売店形式よりコンビニ形式に衣替えをしてオープンいたしました。営業は、24時間営業・年中無休で病院に来院される方々、医師、看護師及び職員の皆さまの利便性・サービス等が向上するよう努力いたしております。

取扱商品は食品、飲み物をはじめ衣料品、日用雑貨、雑誌、玩具、ATM他などを取扱っております。

また、市中のローソン店とは異なり「ホスピタルローソン」を目指して、患者さまがご利用になります各種看護用品・衛生用品・書籍等の取扱商品の充実に努めております。

②簡易郵便局は、昭和57年12月１日に開局しました。

郵便窓口での主な取り扱いは、各種切手（記念切手を含む）、印紙、はがきの販売及び郵便（速達・書留・ゆうメール・ゆうパック他）の受付業務、貯金窓口業務での主な取り扱いは、通常貯金、定額定期貯金他の預入・お支払い、各種振込、公共料金（固定資産税、道市民税、国民年金保険料、交通反則金など）のお支払い、そして各種保険の取扱いも行っております。

③その他事業

自動販売機、ICカード式テレビ、公衆電話、付添寝具の貸出、コインランドリー、レストラン「ななかまど」、スターバックスコーヒー店、理容室、クリーニング、駐車場整理業務、宿泊所（医大前ホテル）の斡旋等を行っております。

また、当財団事務所（玄関棟３階）ではコピー、ファックスサービスの他当財団業務についての種々のご相談も受け付けております。

今後も当財団は、当病院をご利用される方々、医師、看護師及び職員の皆さまにうるおいとやすらぎのある環境づくりのお手伝いをするために、一層のサービス向上に努める所存でおりますので、お気軽にご相談いただければ幸いです。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、患者さまが一日も早く健康を回復されることと、医師、看護師及び職員の皆さまの益々のご健勝を当財団職員一同こころよりお祈り申し上げます。

コンビニエンスストア「ローソン」

簡易郵便局

薬剤部 副作用情報（66）ヘパリン起因性血小板減少症 (heparin-induced thrombocytopenia: HIT)

ヘパリン起因性血小板減少症（HIT）は、ヘパリン投与に合併して多彩な血栓塞栓症を引き起こす重篤な疾患である。非免疫的機序で発症するⅠ型と、免疫的機序により発症するⅡ型に分類される。Ⅰ型は、ヘパリン使用開始２～３日後にヘパリンの直接的な血小板凝集作用によって発症するが、血小板減少の程度は軽度で、自然に回復するため臨床的な意義をほとんど持たない。

臨床的に重要であるⅡ型HITは、通常、ヘパリン投与開始後５～14日の間に血小板減少として発症する。未分画ヘパリン、低分子ヘパリンいずれにおいてもHITは発症し得る。病因は、投与されたヘパリンが、活性化された血小板から放出された血小板第４因子（PF4）と複合体をつくり、その際にPF4の構造変化が起こり、従来は存在しない抗原性を提示し、その複合体に対する抗体（抗血小板第４因子（PF4）-ヘパリン複合体抗体）が体内で産生されることによる。その抗体の一部に、血小板や単球、血管内皮を活性化させるHIT抗体があり、トロンビンの過剰産生を招いて血小板減少、血栓塞栓症を誘発すると推定されている。HITの発現後にヘパリンの投与を中止してもPF4-ヘパリン複合体抗体が体内に残っている間は、血栓塞栓症を発症する可能性がある。

Ⅱ型HITが疑われた場合、まず、ロックなども含めたヘパリンの投与を中止する。また、過剰産生されたトロンビンによる血栓塞栓症を抑えるために、HIT抗体の発現期間中は、血栓塞栓症の発症のおそれがあるため抗凝固療法を行う。国内で唯一HITの際の抗凝固療法に適応を有する薬剤として、抗トロンビン剤であるアルガトロバンがある。アルガトロバンのHITにおける使用に際しては、持続点滴静注を行いながら活性化部分トロンボプラスチン時間（activated partial thromboplastin time: aPTT）で至適投与量を調節する必要があり注意を要する。

（薬品情報室　大滝　康一）

臨床検査・輸血部発 臨床検査・輸血部の評価

昨年、臨床検査・輸血部は看護師さんに当部についてのアンケート調査を行わせていただきました。このアンケートは当部の接遇の良し悪しや、チーム医療の一員として行っている講演・勉強会など18項目についてお尋ねしました。また、これから当部に取り組んでほしいこと、このようなことが出来たらいいなと思っていることを自由に書いて頂きました。配布は33部署に行い、29部署から155通の回答を頂きました。たくさんの貴重なご意見、評価、取り組むべき課題を頂戴しました。あらためましてお礼申し上げます。以下にその一部を紹介させて頂きます。

当部では検体・生体検査に従事する技師はグレーのユニフォーム、輸血関連技師は赤のユニフォームを着用しています。これらの色で60～80％の方は当部の所属する職員と認知されていました。服装・身だしなみについては90％の方が良い評価をしている一方10％が髪型、赤のユニフォームなどに病院職員として相応しくないと回答されていました。廊下でのストレッチャーの移動の際、電話での対応、検査室を訪れた際の対応などは高評価を頂いておりましたが１～２％の方には不快な思いをさせていることが分かりました。

当部が行っている出前輸血勉強会、採血に関する講演は好評を頂き、引き続き開催してほしいとの要望を数多くいただきました。採血に関しては、採血管の種類が多く戸惑うとの意見が多数寄せられ、またそれらの解決法に関しても病院システムの利用など多くの有用な提案を頂きました。採血量に関する意見も多く、患者さんの負担を考えてより少ない採血量での検査を望まれていました。その他に検査値の読み方、検査の過程、心電図検査のコツが知りたいと言った内容や、患者さんに検査の説明をしてほしい等々たくさんの要望を頂きました。また、休日も輸血検査、微生物検査を平日と同じように検査している事など、当部の取り組みへの感謝のことばもたくさん頂きました。

頂いたご意見や要望は、これから当部がチーム医療の一員を担っていくうえで参考にさせていただき、課題に関しては速やかに取り組ませていただきます。

アンケートにご協力をいただいた看護部の皆さん、看護師の皆さんに心から感謝いたします。

（橘　峰司）

病院玄関棟天井の改修工事について

病院正面玄関ホールは、旭川医大病院への入り口として、総合案内や病院コンシェルジュによる各種案内、簡易郵便局やスターバックスコーヒーを設置し患者さんへのサービスに、また、医学部学生などによるコンサートなど、多機能な空間として利用されています。

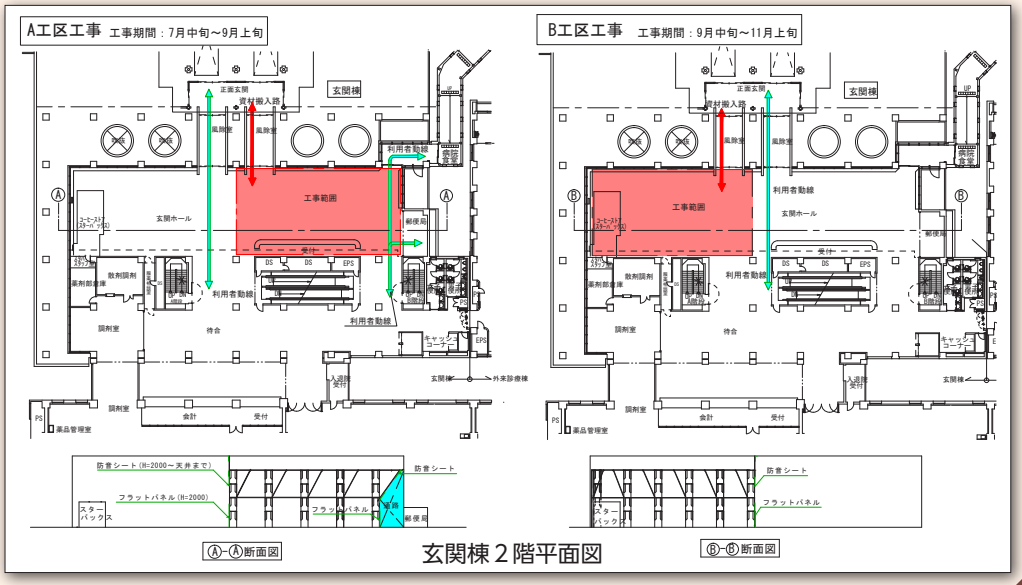
また、災害時には避難施設となりうる場所でもあります。このことから、天井・照明器具・空調設備等の落下防止対策を図るために改修工事を行うものです。

工事期間中は皆様に大変不便をおかけしますが、ご理解いただきますようお願いいたします。

耐震改修工事期間

A工区
平成28年
7月中旬～9月上旬

B工区
平成28年
9月中旬～11月上旬



玄関棟２階平面図

平成27年度　患者数等統計

（経営企画課）

区　分	外来患者延　数	一日平均外　来患者数	院　外処方箋発行率	初　診患者数	紹介率	入院患者延　数	一日平均入　院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日　数（一般病床）
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
１月	29,257	1,539.8	95.4	1,216	80.8	15,479	499.3	82.9	79.6	13.4
２月	29,097	1,454.9	95.2	1,256	79.7	15,102	520.8	86.5	87.4	12.3
３月	33,817	1,537.1	95.2	1,383	78.9	15,936	514.1	85.4	87.7	11.9
計	92,171	1,511.0	95.3	3,789	79.7	46,517	511.2	84.9	84.8	12.5
累計	377,258	1,552.5	95.1	15,910	78.3	189,306	517.2	85.9	84.3	12.6
同規模医科大学平均	281,887	1,159.0	90.9	15,808	79.3	186,869	510.6	83.8	83.5	14.4

時事ニュース

■４月６日（水）入学式

■５月12日（木）看護の日

■５月８日（日）～14日（土）
ふれあい看護週間

■６月11日（土）～12日（日）
第42回　旭川医科大学
医大祭「極医」開催

広報誌編集委員会名簿

区分	氏　名	所　属	職　名
委員長	廣　川　博　之	経営企画部	教　　授
委　員	市　川　英　俊	産婦人科学講座	講　　師
委　員	石　子　智　士	医工連携総研講座	特任教授
委　員	竹　川　政　範	歯科口腔外科	准　教　授
委　員	高　橋　裕　之	臨床検査・輸血部	主任臨床検査技師
委　員	田　原　克　寿	薬剤部	主任薬剤師
委　員	黒　崎　明　子	看護部	副　部　長
委　員	紙　谷　輝　美	企画広報評価課	課長補佐
委　員	佐　藤　和　英	経営企画課	係　　長